

唐津にて山内俊美氏の足跡をたずねて
——「山内俊美宛茅原華山書簡集」の追加調査記

西田 彰 一

筆者は二〇二二年と二〇二三年の三月に、日文研に所蔵されている「山内俊美宛茅原華山書簡集」の追加調査を実施した。山内俊美氏（一九〇〇年～二〇〇五年）は佐賀県唐津市在住の酒造家である（写真1）。山内氏は、後述するように、地元の唐津を中心に多岐にわたって社会的活動を行っていた人物であるが、筆者は大正から昭和戦前期のジャーナリストで、〈民本主義〉の名づけ親として知られる茅原

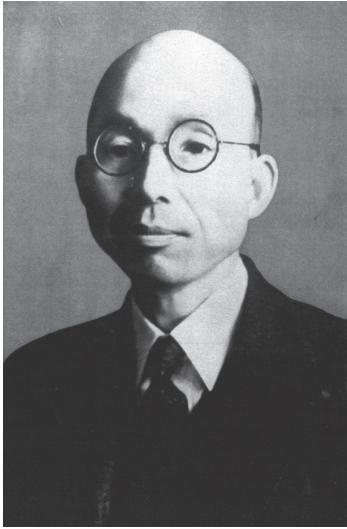


写真1 山内俊美氏肖像（『佐賀県酒造史』より引用）

華山（一八七〇年～一九五二年）の晩年の支援者としてその名を知るようになった。本稿は唐津での二回の調査の結果をもとに、山内氏の事績をまとめた小論である。

本題に移る前に、まずは「山内俊美宛茅原華山書簡集」について少し説明したい。日文研には、二〇一五年に古書店から購入した茅原華山が

その支援者である山内氏に宛てた書簡、二八四点（昭和戦前・戦後）が所蔵されている。書簡の内容は、茅原が戦前から戦後にかけての国際関係や政局の分析を山内氏に語ったものが多く、茅原の晩年の人的な交流、さらにはその思想を知るために非常に貴重な史料となっている。また、茅原の個人文書としてこれほどまとまって見つかったものはこれまでになく、その意味でも重要な史料となっている。筆者は日文研の技術補佐員であった時にこの書簡集の整理に携わり、その成果を『山内俊美宛茅原華山書簡集目録』（二〇二〇年三月公開）にとりまとめ、現在日文研オープンアクセスで公開している。

山内氏は一九〇〇年一月一三日に福岡県糸島郡前原町波多江に生まれた（現在の福岡県糸島市波多江。以下『佐賀県人名録』（佐賀新聞社、一九七五年）を基本情報とし、令孫の山内久美子氏と親族（山内氏の義理の従弟の子）の吉富寛氏からの聞き取りで得た情報で補っている）。旧姓は波多江と名乗っていたが、遠縁の唐津の有力商家である山内家（屋号・東ノ木屋）に養子入りしている。中学修猷館（現在の福岡県立修猷館高校）を卒業後は、慶應義塾大学経済学部に進学。それと前後して、妻の初子氏と結婚した。

山内氏が養子入りした東ノ木屋山内家は、本家の西ノ木屋と並ぶ唐津きつての豪商であった。郷土史家の奥村武氏によれば、初代の木屋山内利右衛門が一五九一年（天正一九年）の名護屋城築城の際に豊臣秀吉の命に従い、築城材木積運搬船船頭として、大阪の堺から唐津に移り住んだという（以下奥村武「旧家の由来 肥前唐津魚屋町木屋利右衛門」（初出一九六三年）松浦史談会編『郷土史誌末蘆國・旧唐津藩地域の史跡調査研究集』（芸文堂、一九八三年）参照）。江戸時代になると、幕府の鎖国政策により海運業が振るわなくなったため酒造業に転じ、大坂の鴻池、博多の大賀、島井、神谷、長崎の末次などとともに豪商の一角を占めたとのことであ

る。木屋山内家は、はじめ城下の大石町、後に魚屋町に屋敷を構え、西ノ木屋を本家とし、一七八一年（天明元年）に分家した東ノ木屋をはじめ、中ノ木屋、裏ノ木屋、角ノ木屋と一族を形成し、大いに栄えた。特に西ノ木屋は歴代当主が大町年寄を務めており、博多の著名な商人であった神谷宗湛、島井宗室、松永宗也などが出入りしており、秀吉関係の古文書や宗湛日記の元本などを多数所蔵していたとのことである。また、京都で捕らえられた日本二十六聖人が長崎に護送される際に、材木小屋を間貸したこと、天野為之が衆議院議員に当選した際に、地元の有力者としてその選挙を支援したことなどが家伝として伝わっている。東ノ木屋山内家はそのような由緒ある豪商の一族であり、山内俊美氏はその六代目の当主となったのである。

山内氏が当主になったころは、東ノ木屋山内家は、本家の西ノ木屋とは別に酒造業を営んでいた。当時の東ノ木屋山内家は非常に裕福な家柄で、山内氏が大学に進学した際には、妻と新婚二人の所帯ながら、お手伝いさんを雇っていたとのことである。慶應義塾大学卒業後しばらくして東京から唐津に戻り、一九二九年に東ノ木屋の当主を継いだ。

家を継いで間もなく襲ってきた昭和恐慌の対処に追われるも、これを何とかしのいで、家業を軌道に乗せた。酒造業者としては、「佐世姫」という銘柄を中心に扱っていた（以下の記述は『佐賀県酒造史』『佐賀県酒造組合、一九六七年』を参照）。アジア太平洋戦争末期には、石油・石炭の不足を補うために軍部の依頼でイモを材料に軍用用の酒精を作っていたが、福岡空襲後に海軍本部を訪ねると本部の士気が異常に低く、家人にこの戦争は負けると語ったとのちに証言している。また占領期には、酒造組合の復興のために、当時の沖森源一知事にかけて、資金援助の要請を陳情したとのことである。

さらに山内氏は本業の酒造業を営む傍ら、佐賀県や唐津市において地域の顔役をいくつも務

めていた。筆者が把握できている範囲だけでも、佐賀県酒造組合の初代会長、唐津裁判所調停協会会長、佐賀地方裁判所調停協会副会長、浄土宗唐津教区檀信徒会会長などを務めている。一九七二年には、長年のこうした活動が評価され、最高裁判所長官から表彰を受けている（『佐賀県酒造史』『佐賀県人名録』参照）。

実子はいなかったが、波多江家から甥の和美氏を養子に迎え、晩年は孫三人に囲まれ穏やかに過ごした。『佐賀県人名録』の記述によれば、趣味としては庭園や絵画鑑賞、漢詩、旅行を好んだそうである。特に旅行は大変好きで、孫たちを連れて各地の美術館や博物館を訪ね歩き、毎年のように海外旅行にも行っていたとのことである。亡くなったのも一〇五歳の時と非常に長寿を保ち、晩年に至っても親族の吉富寛氏に冷戦崩壊後の世界情勢について自分の考えを年賀状で披露するなど、社会に対して非常に意欲的な考えを終生持っていた。

酒造家としての東ノ木屋は、一九八二年に廃業したが、現在もその建物の一部が残っている（『東ノ木屋』『唐津街道 歴史の道調査報告書 第三集』（佐賀県、二〇二一年））。江戸時代後期に建てられた建物として現存しているのは、間口六間の店舗とその西隣に建つ間口二間余りの精米所、稲荷社である。また、一九七八年ごろまでは、さらに北・西部にわたって、酒造業関係の諸施設が広がっていたとのことである。なお、佐賀県の調査報告書によれば、旧東ノ木屋酒造場は事業の発展に伴い、何度か増築が施されており、内部は近代以降に改修が行われているため、当初の状況とは大きく異なっているが、建物の外側正面は、当初の状況をよく留めているとのことである（前掲書参照）。また、養祖父山内久助氏が隠居所として建てた家が唐津市十人町にあり、これも近代的な和風建築として知られていた。山内俊美氏も生前この屋敷を気に入り、自らも隠居所として庭いじりなどをして過ごしていたそうであるが、現在は



写真2 旧東ノ木屋酒造場跡（2023年3月26日筆者撮影）

取り壊されている（『佐賀県の近代和風建築…佐賀県近代和風建築総合調査報告書』（佐賀県教育委員会、一九九六年））。旧東ノ木屋酒造場の建物も老朽化が進み倒壊の危険があったが、唐津を代表する商家であり、唐津くんちのハイライトである曳山通りの景観を残すために、山内氏の遺族や、NPOからつへりテージ機構の尽力により、クラウドファンディング事業により修繕工事がなされた（菊池郁夫「唐津くんちの曳山通りに建つ旧東木屋酒造場を守りたい」『READYFOR』ホームページ、NPOからつへりテージ機構『唐津歴史遺産』ホームページ、「旧東木屋酒造場を開放 唐津市魚屋町」『佐賀新聞』二〇一八年五月二日記事参照）（写真2）。

そうした山内氏と茅原の関係の詳細は、目下分析を進めているところであるが、先述の吉富氏が保管していた山内氏旧蔵の資料から、いくつか興味深い事実が明らかになっている。まず、茅原と山内氏が出会った頃の様子が山内氏

の手記に記されていた。手記が複数年にわたって書かれているため、まだ年代の特定には至っていないものの、記述内容と目付からおそらく一九三〇年代後半（昭和一〇年代前半）と考えられる。目付の方ははっきりしていて、五月七日に山内氏が上京した際に茅原とはじめて面会している。その時の印象を山内氏は「預想と異り和服着流し」べらんめえ口調の「純粋の江戸っ子」と手記に記している。午前十一時に面会し、午後一時まで快談、その後茅原の秘書花澤美栄子氏と合流して昼食をとり、散歩、食後のコーヒーまで一緒に飲むなど非常に親密に接した様子が書かれている。現状書簡集で年代の確認できるもとも古いものは、一九三八年七月二五日の新聞で、内容は日中戦争における国民の心構えを説いたものとなっている。おそらくこの前後に面会したものと考えられるが、いづごろ本格的に交流を開始したのかについて解明することが、現在の課題である。また、吉富氏から前述の山内俊美氏の手記や書簡をはじめとする資料を数十点ご提供いただいたので、日文研所蔵の資料と合わせてそれらを活用することで、今後両氏の交流の実態を解明し、ひいては当時の在野のジャーナリストと資産家の交流の在り方についても解き明かすことができると考えている。

最後に、唐津の調査では、唐津市近代図書館やご令孫の山内久美子氏、ご親族の吉富寛、弥生ご夫妻、旧東ノ木屋酒造場の保存に携わったNPOからつへリテージ機構の菊池郁夫、典子ご夫妻の協力を得た。貴重な資料の提供や聞き取りにご協力いただいたことに心からの感謝を申し上げます、本稿の結びとしたい。

（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）